

第2回国連軍縮特別総会における
本島 等・長崎市長の演説

昭和57年6月24日

私は、45万市民を代表して、長崎市から参りました市長の本島等です。

まず、全世界における戦争犠牲者、特に原爆で尊い命を失なわれた数多くの犠牲者に対し、心から哀悼の意を表します。

私は、みなさま方に核兵器の本当の恐ろしさを知ってもらいたくてここに来ました。

みなさま方は、世界の滅亡、人類の滅亡を実際に見たことがあるでしょうか。

私たちは、この滅亡の姿を見ました。

私たちの郷土長崎市には「出島」がありました。長崎市は古くからこの「出島」を世界への窓口として栄えた由緒ある街です。

1945年8月9日、この街に1個の原子爆弾が落とされました。この原子爆弾は、現在の核兵器と比較すると玩具のようなものです。

ところが、この爆弾は爆発と同時に、石をもとかす熱線と、コンクリートをこなごなに打ち砕く爆風で、街を破壊しました。そして、私たちの上にもっと恐ろしい放射線を浴びせたのです。

立ち昇るキノコ雲の下では、たちまちのうちに灼熱地獄が現出されました。

人々は、熱線を浴びて瞬時のうちに焼き殺されました。砕かれた建物の下敷になって押しつぶされた人もいます。

物の下敷になって動けなくなり、生きながら焼かれていった人も数多くいました。また、人間ばかりではありません。犬や猫、鳥たちも死にました。草木もなぎ倒され焼け死にました。およそ生きとし生けるものすべてが死に絶えたのです。

阿鼻叫喚の後の静寂の中、長崎の街は死の街と化していました。

一面の瓦礫の野の中に、黒焦げの死体がごろごろと転がっていました。

爆心地附近では、あまりの高熱に灰になって死骸さえも満足に残っていませんでした。一秒もたため間に、長崎市の半分が、10数万人もの人々が住んでいた街が消えてしまったのです。

私たちはこの光景を見て、正にこの世の終りを感じました。私たちは世界の滅亡、人類の滅亡のひな型をこの目で見たのです。

現在の核兵器は、長崎の原爆の数千倍の威力を持つといわれています。おそらく人口1千万人前後の国は、一発の核兵器で全滅することでしょう。

このような状況の中で、もし核兵器が使用されたらどうなるのか？答えは明白です。みなさま方のお国の至る所で、今いったような光景が見られるようになるのです。そして、やがてそれは地球全土に広がるでしょう。ひな型ではなくて本当に世界の滅亡、人類の滅亡になってしまうのです。

私たちは核兵器の存在そのものを恐れます。なぜなら、現に存在する以上それが絶対に使用されないという保証はないからです。また、偶発的事故だって絶対にあり得ないとはいえません。

あれから37年、私たちは懸命に長崎市を復興しました。それと同時に憎しみを超えて、人類共存の理念のもとに、世界に核兵器廃絶を訴え続けてきました。

現在の長崎市は、市民の大きな犠牲のもとに築かれたのです。しかし、その影には、今だに放射能障害で苦しんでいる人がたくさんいます。

原爆で家族全部を失い、一人ぼっちで寂しく余生を送っている老人も多いのです。

私たちは、私たちの体験から、核兵器の存在がいかに人類の生存を脅かしているかを知っています。絶対に第三発目の核兵器を使用させてはなりません。

長崎市は、永遠に、地球上における最後の被爆地でなければならないのです。